岩波文庫

31-035-2

歌道小見・随見録

他一篇

島木赤彦著

岩波書店

歌道小見・随見録 他一篇

1954年11月5日 第1刷 発 行
1983年10月17日 第5刷改版発行 ©

定価250円

著 者 島木赤彦（しまぎあかひこ）

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan

岩 波 文 庫

31-035-2

歌道小見・随見録

他 一 篇

島 木 赤 彦 著

岩 波 書 店

はしがき

○「歌道小見」は、歌に入りはじめた人にも、久しく歌の道におる人にも、あるいは単に歌を鑑賞する人にも通ずるような歌論をなしたいと思って、稿を起したものである。久しく歌にいるもの必しも歌を解せず。歌の門外にいる人が往々巨大の眼で歌を見ることがある。歌の道は、人情自然の道であって、万人共通の大道にあるべきである。歌の門内門外を問わず、博く教示をうけたいと希うて、この稿を起した所以である。このうちの一部に、大正十一年或る雑誌のため書いたものがある。意に満たないで多く改め、かつ、大部分を補足した。

○「万葉集の系統」は大正八年十月慶応義塾図書館で口述したものの筆記である。そのうち歌例の説明は、昨年十月末大連南満洲鉄道会社食堂で口述したものから採ったものがある。大正八年以後の事に言及している所のあるのは、そのためである。両所の談話その趣旨殆ど同じである。本書へは、慶応義塾の方を収めた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

○「随見録」は、雑誌『アララギ』に書いたものであって、万葉集に関係あるものと、現歌壇と交渉あるものの一部を輯めた。

○「万葉集の系統」「随見録」を収めたのは「歌道小見」に述べた愚見を、それによって余計に明瞭にし得るかと思うたからである。小著の主眼は「歌道小見」にある。

大正十三年三月二十二日記す

目次

はしがき……三
歌道小見……九
古来の歌……一一
万　葉　集……一三
万葉集の性命……一五
万葉集の読み方……一七
万葉集以後の歌集……二〇
古歌集と自己の個性……二三
歌を作す第一義……二六
写　生……二七
主観的言語……二九

歌の調子……三三
歌の調子つづき……三八
単　純　化……四三
表現の苦心……四六
概念的傾向……四八
比喩(ひゆ)歌(か)……五二
象　　徴……五四
官能的傾向……五六
思想的傾向……六一
用　　語……六三
連　　作……六六
万葉集の系統……七一

随見録……一〇三
短歌と日常生活……一〇五
山上憶良(やまのうえのおくら)の事ども……一〇九
憶良と赤人(あかひと)……一一三
前田夕暮(まえだゆうぐれ)氏に質(ただ)す……一一八
万葉集諸相……一二四
万葉集諸相　つづき……一三〇
万葉集諸相　つづき……一三四
前田夕暮氏の答……一三七
前田夕暮氏の答　つづき……一四四
大隈言道(おおくまことみち)の歌……一五六
再び言道について……一六一
現歌壇と万葉集……一六四
解説……柴生田稔……一六九

歌道小見

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

歌の道を如何に歩むべきかということは、人々の性質や経歴によって、一概にかくあるべしと定め得るものでないでしょう。ここには、ただ、私の好みと、私一人の信ずる所とによって、気の付いたところの大体を述べましょう。

古来の歌

短歌は、最も古くから日本に生れた詩の一体であって、それが長い間の流れをなして今日に伝わっているのでありますから、歌の道にあるほどの人は、古来の歌の中で、少くも権威を持っている歌人の歌を知る必要があります。そうでないと、往々、一人よがりの作品に甘ずるような結果を生じます。明治三十年代和歌革新以後にあって、多少素質のいい作品を遺したと思われる人の歌を見ても、この人が、どれほどまで古人の歌の前に礼拝したかということを思うて、その作品に、或る遺憾を感ずる場合があります。

我々は、自分が生れる時授けられた性情の一面を歪めたり、遺却したりして生長しているのが普通であります。現世の環境に歪みがあり、虧欠があるからでありましょう。その遺却され歪められたものが、古人の作品に接触することによって、覚まされたり、補われたりすることが多いのでありまして、さような問題に無関心で歌を作している人は、自分では自分全体を投げ出しているつもりでも、それが、なお、一人よがりに終る場合が多いようであります。勿論、古人の作品に接することが、自己を覚醒し補足することの全部であるとは思いませんが、歌の道にあるものが歌の道の由来する所を温ねて、そこから啓示されるということは、直接で自然な道であろうと思います。歌に入ろうとする人も歌の道に久しくおる人も、この意味で、古人の作品に常に親しむことが結構であると思います。それは、古人の作品を見本にして歌を作すこととは違います。

万葉集

それならば、先ず第一に、どんな歌集に親しめばよいかということになります。それには、私は躊躇するところなく、万葉集を挙げます。

万葉集は、我々の遠い祖先から伝わった歌の精神を、最も素直に受け継いで、それを、広く、豊かに、深く透徹させて発達したものでありまして、古来の歌集中最も傑れたものであります。これを時代から言うと、今から千五百年前頃から、四百四五十年間にわたった作品を輯めたもので、飛鳥朝藤原朝奈良朝(万葉集を言うには、舒明以後奈良朝までをかように分けぬと都合が悪いようです。藤原朝は十数年に過ぎませんが、万葉集最盛期をなしていますから、やはり他と分つ方が好都合です)の作品を最も多く収めてあります。そのうち、飛鳥朝の末頃から、藤原朝を中心として、奈良朝の初期頃までがこの集の頂点を成しているのでありまして、その中で、特に高い位置を占めているのが、柿本人麿と山部赤人であります。この二人は、古来歌聖と言われている人でありまして、日本の人は、皆その名を知っておりますが、どんな作品を遺しているかということは知らぬ人が多いのであります。特に、その作品のうちで、どんなのが傑れた作であるかということは、専門の歌人も見当のついておらぬ人が多いのでありまして、古来、さような問題に到達して、人麿赤人を説いた人は殆どないのであります。それほど、歌人というものが、古人の作品に無関心であり、あるいは、無関心でなくとも、その作品の命にまで触到するということが少なかったのであります。元来、傑れたものを認めるのは、傑れた心の持主でなければなりません。人麿赤人の歌の高さ深さを知るのは、我々には一つの修業で

あって、それが、一面には自分の心を開拓する道になるのであろうと思います。

人麿赤人は、万葉集中の傑れた作者でありますが、この二人を以って、万葉集を代表させるということは出来ません。それは、この他になお沢山傑れた作者がありまして、それが、各、自己の本質に根ざして、立派な歌を作しているからでありまして、これらの作者は、決して、人麿や赤人を小さくしたり、薄くしたりしたものでありません。万葉集の作者は、殆ど凡ての人が、皆自己の本質の上に立って、各特徴ある歌を作しているのでありますから、万葉集を知ろうとするには、やはり、万葉集全体を知らねばならないのであります。詳しく言えば、万葉集の初期と末期では、歌の命にかなりの相違があり、特に末期に近づけば、相違が余計に目に付くのでありますが、それもなお総括的には以上の言が為されるのであります。歌の数は、長歌短歌旋頭歌すべて四千五百首ほどでありまして、作者は、皇帝皇后より農夫漁人、大臣も将軍もあれば防人(今の守備兵二等卒という所です)も資人(官人使役の従者です)もあり、下っては遊行婦女(昔の芸妓です)もあり、乞食もあるというように、すべての階級を通じての人が、必然の衝迫から赤裸々の人間となって歌いあげているのでありまして、この点から見れば、各作者の絶対個人的要求に徹して生れた歌集であると言い得ると共に、一面からは、それが、宛らに当時の民族的性情を代表しているという観があります。近頃は、歌が民衆的でなければな

らぬ。普遍的でなければならぬ。言い換えれば、一般の人に分るように歌われねばならぬという議論が、歌人の一部に行われているようであります。それは議論として差支えありませんが、歌を作すものが、さような条件を目安において歌おうとするの愚なることは、万葉集作者の態度と、その作品のもつ意義を考えて見れば分ります。ここには横道でありますが、序を以て言及するのであります。つまり、万葉集は、何所までも個人的要求から生れた歌集であると共に、それが直ちに民族を代表する歌集になっているのであります。これは、万葉集の大きな特質でありまして、単に歌の上のみならず、その他の点から日本民族の血液の源泉を知ろうとする人々のためにも、儔罕なる宝典であり得ると思います。

万葉集の性命

万葉集時代の人は、心が単純で、一途で、調子が大まかで、太くて強いところがあったようであります。それが宛らに歌に現れております。単純一途であるから、原始的な強さと太さとを持っており、子どもの如き純粋さと自由さを持っております。それが様々の相となって生長して、或るものは、芸術の至上所と思われる所にまで到達しているのでありますが、さような

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com